

と「他國侵逼難」とは彼等の不信の結果として彼等の頭上に落ち來らんとすと豫言せり、余輩は彼の中古的教育が典經以外に自然的現象を解することを彼に許さざりしを惜む、然れども日蓮は全く誤らざりし、學術の進歩を以て誇稱する吾人は彼の非科學的なしを笑ふと同時に彼に吾人の有せざる心、靈的本能の存せし事を許さざるべからず。

心靈的本能

自然界と心靈界

自然界は心靈界と全く域を異にするものにあらず、道德的の原因は自然的結果として現はれ、人は客觀的現象を以て主觀的動靜を察するを得べし、此觀念たる人類の有する本能の一にして科學の進歩は容易に之を吾人の腦裡より排除する能はず。

吾人目前の災異にして現然たる罪惡の結果たるものは枚擧するに遑あらず、旱魃と洪水とは常に相伴ふて來るもの、而して二者共に山林の濫伐に基く事は已に何人も承認する所なり、洪水は人類の貪慾が他人に率先せられん事を恐れて先を争ふて山野の林裝を剝奪するより來るものなり、洪水と罪惡との關係は實に最も近きものなり、疫癘と道德との關係に至ては更に明瞭緻密なるもの、勿論之に罹るものは皆な悉く其犯せ

天災と罪惡

し罪の刑罰に依ると言ふを得ず、然れども社會として國家として人類として之に惱さるゝは現然たる道德的源因よりする事は理の最も睹易きものなり、幾多の火災は不平怨恨嫉妬より起りしよ、幾多の饑饉は非政の結果なるよ、人は災害を己に歸せずして天を恨む、然れども災害の多分は人爲を以て排除し得べきものなり。

日本の颶風は其地理學上の位地に因るものなり、其震災は其地質的構造の然らしむる所なり、吾人は改悔懺悔するも是等災害より免るべきに非らずとせん。

道德的に災害を減少す

地震颶風は道德的に避くるを得ず、然れども道德的に其災害を減少し得るなり、恐怖の念は苦痛の極なり、恐怖は不幸を張大ならしむるもの、恐怖去るに及んで人生の苦痛の過半以上は去りしなり、而して恐怖は罪惡の直接の結果なり、恐怖の民は災害を最も多く感ずるものなり、故に仁政行はれ民各其天職に安んずる時は慧星顯るゝと雖も之に意を留むるものなく、震災の犯す所とたるも損傷を感ずる趣し、古昔より噴火震災が罪惡に沈める社會を警醒せし實例甚だ多し、有名なるソドム、ゴモラの兩市が陥落して今日の「死海」と成りし事、ベスピアス山の噴裂に依てポンペイ、ヘルクユレ

「ニユムの填塞せし事、千七百五十五年のリスボン府の大地震、近くは歐洲賭博の中心なりしリヒエラ沿岸の破壊、是等は地動的災害が罪惡に伴ひ來りし著名なる實例なり、余輩は天が殊別に積惡の民に災害を下し給ふや否やを知らず、然れども天災は刑罰として積惡の民に最も強く感ぜらるゝの一事を明言するに躊躇せざるなり。

詩人にして
科學者にあ
らず

誤謬は彼の
前提にあり

彼の深き隘
さを示すも

客觀的に主觀的に災害は日本人民を惱ませり、日蓮は詩人にして科學者に非らず（宗教家は概ね然り）、彼の道德は佛教なり、彼の佛教は法華經なり、故に自然的災害を以て法華經流布の障害より來りしものとせしめ、是れ彼の前提プレミッスより來る自然の結論なり、誤謬は彼の前提にありて彼の論法にあらざりしなり、災害は道德的原因の結果として見るを得べし、或る意味より言へば吾人改悔の爲め天の送りし警戒と見て可なり、然れども是を以て法華經流布の妨害より來りしものとせしめしは日蓮の偏見なり、恰も基督教徒が國難の起るを以て其宗教の傳播せざるが故なりとし、新教徒が伊國の震災を以て天主教徒の跋扈に歸するが如し、立正安國論は日蓮の深き隘とを同時に示すもの、「國は法に依て榮（法は人に依て立つ）、是れ何人も抗言する事能はざる所、「正法に背

けばその國に七難起る」、是れイザヤもエレミヤもルーテルもカントもソクテテスも承認する所、然れども正法（眞理）を以て彼の法華經と同意義ならしめし事は彼の狹隘と無學と固執とを示せり。

元寇豫言

豫知は詩人
特有の感能
なり

日蓮の元寇豫言は屢非難を受けしもの、其當否は純粹歴史の問題にして余輩の爰に論ぜんと欲する所に非らず、然れども日蓮の性を以て異國の侵迫を前視せりとは余輩の信ずるに躊躇せざる所なり、それは感能過敏彼の如きものが將來を未發に前知せし事は其例決して尠なからざればなり、豫知は詩人特有の感能なり、詩人ゲーテに其著しく發達せし事は彼の記録に存して明なり、加奈太オンタリオの人類學者博士アール、エム、パツク氏曾て Cosmic consciousness (宇宙的感能) なる論題に付て彼の研究の結果を某學會に報じたる中に、彼は人心が發達して終に宇宙の事物を未發に知覺し得るに至るを述べたり、而して其實例を挙げ、使徒保羅、シェークスピア、佛國の小説家バルザック (Honoré de Balzac)、獨の神秘學者ベーメー (Jacob Boehme)、英の畫工詩人ウヰリアム、ブレイク等を以て最著名なる者とせしめ、瑞典國の神秘的哲人スウヰ

デンホルクの未來豫言が能く適中して彼の學敵哲學者カントを驚かせし事は能く知れ渡りたる事實なり、然れども僧日蓮の豫言と最も相似寄りたるものは伊國フローレンスの宗教改革者サボナローラの豫言なり、彼は彼の國人の罪惡を責めて其現罰として他國の入寇あらん事を豫言せり、而して彼の宣言果して違はず、千四百九十四年佛王カール第八世の攻入を見たり、是れ何人も疑ふ可からざる歴史上の事實なり、日蓮サボナローラ兩雄の相似たるは此一事に止まらず、激熱なる彼等の特性、兇語に富める彼等の辯舌、燃ゆるが如き彼等の誠實、抗す可からざる彼等の勇氣……日蓮を東洋のルーテルと稱するは不可なり、日蓮は東洋のサボナローラと稱すべし。

日蓮の元寇豫言は比類なき心理的現象に非らず、然れども彼が是を以て法華經尊奉を國民に強ひしは彼の偏見妄想と言はざるを得ず、余輩の已に論述せしが如く彼は已に彼の前提に於て誤まれり、超自然的の彼の天才は彼の智識欠乏の爲に屢曲用せられたり。

其四

立正安國論は日蓮を時の政治と衝突せしめたり、彼は今は宗敵に政敵を加へたり、陳腐僧侶と政治家とは常に相提携して革新家に當るものなり、兩者の存在と安逸とは社會の奴隸的服従を要す、革新家は彼等の最も厭ふ所、盲啞的に彼等を尊信拜崇するものを彼等は指して忠臣と稱し、信心家と呼び、彼等の迷信闇愚に逆ひ、彼等の拙政劣略に喙を容るゝものを彼等は異端と呼び、不忠と名づく、日蓮に其觀を時宗ありしは基督にカヤフハスとピラトあり、モハメツドにコレシユの族あり、ルーテルに法皇レオ第十世と獨帝カール第五世ありしが如し、眞正の革新家として此二種の讐敵を有せざるはなし、薄弱なる平凡人間は敵なきを以て善人の徴候となす、曰く「彼は何人にも愛せられたり」と、彼等は大きな善人の資格を知らず、大敵を有せざる人に余輩は巨人の名稱を附せず。

陳腐僧侶と政治家とは革新家に抗するもの

大きな善人の資格

東洋のサボナローラ

迫害の時代

文應元年安國論を執權北條時頼に納れてより文永十一年佐渡流竄を赦されし迄十四年間は特に日蓮の迫害時代なりし、彼れ一生の四大厄難なる小松原の襲撃、龍の口の劔難、伊豆佐渡の謫流は實に此時代にありき、激烈なる迫害此の長時間に亘りて日蓮の大望計に些少の撓屈をも加ふる能はず、法華經勸持品は彼の特愛の一卷なりしが如し、彼は笞杖謫流劔難の彼の身に迫り来るを見て法華經の使徒たる彼の天職を益々確認するに至れり、如何に太古の殉教者の生涯が彼を幽裡に慰めしかは彼の書翰の一に見へたり、

付法藏二十五人は佛を除き奉りては皆を佛のかねて記し置き玉へる權者なり、其中第十四の提婆菩薩は外道に殺され、第二十五の師子尊者は檀彌栗王に頸を刎ねられ、其他佛馱密多龍樹菩薩なども多くの難に値へり……正像猶かくの如し、中國又然り、これは邊土なり末法の始なり、かゝる事あるべしとは先に思ひ定めて期をこそ待ち候へつれ云々、

是れ同じく初代基督信徒の慰藉なりしなり、

我れ更に何を言はんや、若しギデオ、ペラク並にサムソン、イビダ、ダビデ並にサムエル及豫言者等の事を言はんはんに時足らざる也……或人は嬉笑を受け鞭打たれ、縲紲と囹圄の苦を受け、石にて撃たれ、鋸にてひかれ、火にて焼かれ、刃にて殺され、綿羊と山羊の皮を衣て經あるき、空乏して艱苦あり、世は彼等を居くに堪へず、彼等は曠野と山と地の洞の穴とに周流たり……是故に我儕は耐忍て我儕の前に置かれたる馳場を趨るべし、

日蓮を以て詭計詐偽の徒と見做すものは深く彼を識らざる人にあらざれば自身彼の邂逅せし艱難に會せざりし人なり、偽善者は十五年間の縲紲周流に忍ぶ能はず、利慾は社會の大勢力なりと雖も誠實の堅忍不拔なるに及ばず、艱難は眞偽を判するため自然淘汰法なり、余輩日蓮を嘲罵する人を見るに多くは是れ偷安的腐儒の輩、宗教學者にして宗教家ならざるもの、基督教の聖書に所謂「未だ血を以て争ひし事なき人」なり。

日蓮は能く迫害に堪へしのみならず彼は能く迫害に勝てり、謫流二回、彼は謫地を彼

十五年間の縲紲周流

迫害に勝てり

の宗義に教化せり、伊東在留の三年は伊豆一ヶ國を彼の宗領に加へたり、佐渡流寓五年、彼は亦た越佐を得たり、彼に接して彼に化せられざるは稀なり、彼を放つは疫癘を放つが如く危し、彼が脚迹を遺せし處は彼の教義に感染せざるはなく、如何なる權力制裁と雖も彼の傳教者たるを妨ぐるを得ざりき。

宗門弘通の免許下る

日蓮宗の危期

北條氏を卻けたり

文永十一年三月廿六日彼は赦免を得て鎌倉に歸れり、全五月二日宗門弘通の免許は下りぬ、時に日蓮齢已に五旬を超へ、彼の確信は天下の政權に勝てり、社會の尊信と畏敬とは今は彼の身上に鍾れり、余輩は云ふ、日蓮宗の危期は龍ノ口に非らずして實に宗門公許の此時にありしと、僧日蓮の大は再び著しく此時に顯れたり、彼は權門に倚り頼むの愚と險とを知れり、彼は良觀良忠道隆の輩が權門に媚ぶるの醜態を目撃せり、彼は彼の身に政教協同の毒害を受けたり、政府の許可を得るを以て最上の特權と見做す日本人中惟り日蓮は之を輕視せり、執權北條氏は日蓮の厚意を求めて日蓮は北條氏を卻けたり、宗教家たるもの、自信と權幕とは斯くあらまほし、法王レオ三世が蠻王アラリックの羅馬侵入を拒みし、アムプロースが大帝セオドシユスを擁してミランの

免許状を棄却して身延に退隱す

彼の快樂は全く心霊的なりし

教堂に入るを許さざりし、サボチローラが佛王カールを叱咤してフロレンス城より退去を命ぜし、ジョン、ノックスがマリア女王を面責せし、皆々宗教家の好例として傳へしる、我邦の宗教家は動もすれば政權の庇保に與かりしを以て誇る、知らずや是なん我邦に於ける佛教衰退の大原因なるを、帝王の帝王(Imperium in imperio)、監督の監督(Episcopus Episcoporum)、是れ真正なる宗教家の位置なり、宗教政權に依り頼んで腐敗せざるはなし、日本の佛法然り、西洋の基督教然り、日蓮は執權時宗の黒印ある免許状を棄却して身延の草庵に隱退せり。

隱退後の日蓮に就ては余輩の多言を要せず、彼を野望的失意家と見做すものは身延に於ける彼の生涯を學ぶべし、住居は柱十二本三間四面茅屋の草堂、食は藜の羹野菜の鹽煮粟稗に乾蕨を炊き雜へたるもの、歸依檀越の布施を受けず、法弟と共に鋤を取り粟を蒔き菜を植へ樗栗等の山菓を蓄へ以て無慾の彼の欠を補へり、彼の快樂は全く心霊的なりしなり、

たち渡る身のうき雲も霽れぬべし

宗教家は貧
居を撰ぶ

日蓮上人を論ず

妙の御法の鷲の山風

二百四

貧居は宗教家の義務に非らず、然れども眞實なる宗教家は貧居を撰ぶものなり、そは
彼は内に足りて外に需むるの要なければなり、否な外に満て内に渴することを懼るれば
なり、モハメッドが西亞の半を切り従へて猶ほ自ら己の衣服を繕ひしが如き、聖ペル
ナードが貧を呼で「我の最愛の姉妹」と云ひしが如き、ルーテルの大なるも時々日用品
の欠乏を告げしが如き、僧日蓮も同一の境遇と云はざるを得ず、幸福なる「ホーム」を
作ると稱して肉躰の快樂を得るに汲々たる宣教師と彼等の信徒、身は高貴も及ばざる
榮華に居て如來の化現なりと自ら欺く佛家、宗教末世の現象、是れを懃歎の極と稱せ
ずして何とか稱せん、西諺に曰く Church is Purest when it is poorest (教會は最も貧
なる時に最も清し)と、日蓮の貧居は實に敬すべきに非らずや、汝玻璃室内に在て安樂
椅子上に宗教問題を考究するものよ、僧日蓮は汝の會得外に在り、

彼は最終最
大のもの

弘安五年十月十三日彼は武州池上に於て入滅せり、彼れ失せて以來日本國に大宗教家
出です、彼は最終最大のものなり、我邦の佛教は十三世紀の終に當て其絶頂に達せり、

純然たる一
平民

誠實と忍耐と勇氣と確信と先見とに於ては余輩は我國の宗教歴史上日蓮と比すべきも
のあるを見ず、彼に眞正の宗教的知覺ありし、宗教を以て治國平天下の一方便と見做
すもの多き我國人中日蓮のみは宗教的に眞面目なりし、彼の敵人は彼を以て穢多の子
なりとせり、其然るや否やは余輩の知る所に非らずと雖も彼は純然たる一平民たりし
は彼自ら表白する所なり、彼は彼の天職の高きを講ると同時に彼の社會的身分の下劣
なるを認めて耻ぢざりき、「日蓮は日本國東東條安房の國海邊の旃陀羅の子」なりと
は彼が自ら書せし所、彼に若し貴むべきあれば是れ彼の遺傳の故に非らずして全く世
尊釋迦如來の敎命に依る、

我はかひなき凡僧なれども法華經を弘むれば釋尊の御使なり、梵天帝釋も我が左右
に事へ、日天月天も我が前後を守り、天照八幡も頭を垂れて我を敬ふべし、

是れ彼が本間重遠に語りし所、實に彼の宗教的生命力の泉源たりしなり、

人よりに非らず、亦た人に由らず、イエス、キリストと彼を死より甦へらしめ父な

宗教的生命
力の泉源

日蓮上人を論ず

二百五

ら千八百年の永き其の信徒たるもの、内に此美德を發揚するを得ざりき、然れども世が十八世紀に入りてより寛裕の精神は頓に勃興し、レンシングは彼の有名なる劇作「Nathan der Weise」(智者ナタン)を以て痛く時の神學者流の狹量を駁し、歐洲人の最も思ひ嫌ふ猶太人を捉へ來り、其美質を稱揚して異教人種の高徳を贊せり、シモン、ハワルドの慈善事業、リボンクストンの亞非利加傳道、ウヰルバフオース、ガリソンの奴隸廢止運動は全く此宇宙的推察の感念より來りしものなり、佛のラコーデヤ(Laocordia)は熱心なる天主教徒として宗教的寛裕を賞揚し、英のテニソンは超宗派的句調を以て直ちに人類の普通感情に訴へ、米のホヰツテイヤ、ローエルは各自斷乎たる獨特の確信を有しながら對他的寛裕の美を謳へり、英のチーン、スタンレー、米の監督フヰリツプス、アルソックスは大西洋の兩岸に於ける寛裕論の使徒として現はれたり、宗派論未だ全く西洋の諸國に絶えず、然れども己れの宗派外の人を目して無得道墮地獄となすものは今は中古的妄想者として彼等の社會に容れられざるに至れり。寛裕の欠乏は宗派撲滅の目的を以て起ちし日蓮をして最も頑固なる宗派の設立者たら

宗派的精神

しめたり、日蓮の精神は實に宗派的の精神なりし、何となれば宗派なるものは其奉ずる主義を以て無比惟一のものに見做より來るものなればなり、ラコーデヤ曰く「寛裕とは他人の確信に尊敬を置く事なり」と、日蓮は他人の確信を賤しめたり、寛裕殆んど全く彼にあるなし、而して日蓮の信徒は多く其師に倣へり、所謂「固まり法華」なるものは我國の宗教家中最も頑固なる旁門者なり。

氣骨と雅量

確信欠乏して吾人に氣骨なし、寛裕欠乏して吾人に雅量なし、二者は真理の兩面なり、反對性の如くにして同一物の兩性なり、日蓮は他の多くの宗教熱心家と共に確信の一方に著しく發達して寛裕の方面に萎縮せり、完全なる宗教は兩面の發達にあり、吾人は己れに足りて人を恕すべし、真理は宇宙大なり、我れ一人の掩ふべきに非らず、然れども我も宇宙の一部分なり、我の立つ所は我の有なり、他人をして之を侵さしむべからず、是れ寛裕の哲理なり、僧日蓮は此理を解せざりしが如し。

寛裕の哲理

日本に於ける佛教改革は日蓮の大目的たりしなり、而して余輩は信ず、彼はその目的の一部分を達せり、彼は厭世的なる佛教をして實用的たらしめたり、彼は印度の宗

日本に於ける佛教改革

教なる佛教を日本的たらしめたり、彼は僧侶的佛教を平民的たらしめたり、我國の宗教歴史に於ける日蓮の功績は決して尠少ならず。

然れども彼の宗教改革は中途にして止みぬ、彼れ死してより六百年後の今日の日蓮宗は他の佛法諸宗と運命を共にせり、日蓮の遠望は先づ日本を教化し而る後朝鮮支那に弘通して終に釋迦の本土なる印度に及ぼさんとするにありき、而して偶々日持聖人の如きありて法華經を異域に傳ふるものありしと雖も日蓮宗は日本の宗教として終り、日本人少數(比較的)の宗教として終はんぬ、而かのみならず彼れ日蓮が大言して「高十六萬八千仞の須彌山を刳削めて硯となし、大千世界の草の葉を筆に結び、大海を硯水として之を記すとも書き盡し難し」と讃め立てたる法華經の功德も今は彼の宗教に歸依するもの、普通道德をも維持し得ず、池上の聖地は穢汚男女の祈願を込むる處となり、或は清正公崇拜の迷信と化して姪夫婦の歸依する所となり、或は蓮門教會となりて明治の昭代に闇を生ぜり、日蓮宗は宗教的熱心を喚起せし倫理的に日本を教化せず、日蓮の改革事業は實に教法的たるに止て倫理的たるに及ばざりし、彼は法を崇

日本人少數の宗教として終りぬ

法典崇拜家となりぬ

むるの餘り法典崇拜家(Bibliolator)と爲りて止みぬ、彼の意勿論法の實行を忽にするに非ざりしは明なり、彼が弟子日朗を讚賞するの語に曰く、

世間に法華經を讀むに口ばかり詞ばかりは讀むとも心に讀まず、心に讀めども身に讀まず、貴邊(日朗を指す)は身と心とに讀み給へば父母並に一切衆生を助け給ふべき御身なり、

由此觀之れば日蓮在世の時早や已に「口ばかり詞ばかり」に法華經を讀むもの多かりしを知るべし、法華經の功德は是を身に實行するに非ざれば得る能はずとは普通觀念に照して明なり、然るに此實行の法華經に重きを置かずして經典其物を尊戴し、其名を唱ふるを以て善行に價するものと見做すに至りしは誤謬の最も甚しきものと謂はざるを得ず、南無妙法蓮華經なる題目は門徒の南無阿彌陀佛、天主教徒の「アベマリア」と均しく倫理的に一の價値を有せず、法然上人の念佛を排撃して之に換ふるに彼の發明の題目を以てせしは一の迷信を以て他の迷信に換へしに過ぎず、是れ日蓮の改革事業の根本的たらししを證し、其早く腐敗の途に就きし理由なりと言はざるを得ず、

彼の改革は根本的たらしりし

經典崇拜は
偶像崇拜に
優る

「ホメツドの改革サボナローラの改革の稍や健全なりし理由は全く彼等の宗教事業に倫理的分子の多かりしが故なりとす。

然れども經典崇拜は偶像崇拜に優る、若し人類の技工にして拜すべきものありとすれば書物は最も崇拜の價值を有するものなり、故に木石を拜するを止めて經典を拜するに至り人に依らずして法に依るに至りしは宗教的思惟上非常の進歩と謂はざるを得ず、モハメツドが天隕石の崇拜を痛撃して之れに換ふるに「コーラン」を以てせしが如き、ルーテルが天主教のマリア崇拜を棄却して「バイブル」に縋りしが如き、皆な進歩的行爲と言はざるを得ず、日蓮は木石崇拜の佛法を去て經典崇拜の佛法を造り出だせり、彼は改新家の名を負ふて可なり。

彼の力量に
應ずる改革
を加へたり

然り吾人何人か完全なる改革者たり得る者ぞ、人生のはかなき彼は進歩に歩一步を加へて去るのみ、日蓮は彼の時代の宗教に彼の力量に應ずる改革を加へたり、今日は今日の改革を要す、明治の改革は文永の改革に非らず、十九世紀の要する改革者と見做

純粹なる日
本的宗教家

すが故に日蓮に多くの瑕欠あり、然れども十三世紀の日本人として余輩は彼に非常の敬慕の念を表す、彼は吾人に誠實の眞價値と實力とを教へたり、彼は獨立傳道の實例を與へたり、日蓮上人を産せし日本はルーテル、サボナローラを出すに難からず、余輩は彼の如き人物の我國史に存するを感謝す、噴火山の如き激熱、地震の如き撼動力、詩人の最も高きもの、大和魂の靈化せしもの、日蓮は純粹なる日本の宗教家なり、彼に寛裕の分量を加へ、十九世紀の教育を施さば、彼の如きは今日の日本を化して世界を化するに至るもの、リニョ、ラコーデヤ、ルイコスートの如き人は日蓮の性に世界の氣を吹き込みしものなり。

警世雜著終

豫告

内村鑑三著

日本及日本人

(英文)

(JAPAN AND THE JAPANESE)

此書曾て民友社より出版せしが、暫く絶本となりたりしを、今回弊社に於て買受け、目下精密なる訂正を加へつゝあれば、不日面目を一新して再び江湖に現はれんとす、幸に大方諸君の留意を希ふ。

東京獨立雜誌社

明治廿九年十二月二日印刷
明治廿九年十二月五日發行
明治三十年二月十三日再版印刷發行
明治三十二年二月廿五日三版印刷發行
明治三十三年五月十二日改版印刷
明治三十三年五月十七日發行

定價參拾錢

著者

内村鑑三

發行者

東京府豊多摩郡淀橋町大字角筈百一番地
坂井義三郎

印刷者

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
戸上義章

發行所

東京府豊多摩郡淀橋町大字角筈百一番地
東京獨立雜誌社

印刷所

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
株式會社 秀英舎 工場

發賣所

東京市神田區佐柄木町二十一番地
東京獨立雜誌社販賣部

版權
所有

新刊

内村鑑三新著

宗 教 座 談

定 價 金 三 拾 錢

郵 稅 金 四 錢

- 目 次
- 第一回 教會の事
 - 第二回 真理の事
 - 第三回 聖書の事
 - 第四回 祈禱の事
 - 第五回 奇蹟の事
 - 第六回 靈魂の事
 - 第七回 復活の事
 - 第八回 永生の事
 - 第九、十回 天國の事(上、下)

著者素と基督教を信ず、然も身は全く現時の基督教界なるもの、外に在り、是れ聊か沿々の時流と所信を異にするものあればなり、本書は著者が他の請に任せて自家立脚の地より基督教を説明せしもの、敢て空漠の理論に涉らず、行文亦た通俗に随ひ何人にも理解し易し、世風不振の今日幸に一讀を煩すを得んか。

新刊

内村鑑三新著

宗 教 座 談

定 價 金 三 拾 錢

郵 稅 金 四 錢

- 目 次
- 第一回 教會の事
 - 第二回 真理の事
 - 第三回 聖書の事
 - 第四回 祈禱の事
 - 第五回 奇蹟の事
 - 第六回 靈魂の事
 - 第七回 復活の事
 - 第八回 永生の事
 - 第九、十回 天國の事(上、下)

著者素と基督教を信ず、然も身は全く現時の基督教界なるものゝ外に在り、是れ聊か滔々の時流と所信を異にするものあればなり、本書は著者が他の請に任せて自家立脚の地より基督教を説明せしもの、敢て空漠の理論に涉らず、行文亦た通俗に随ひ何人にも理解し易し、世風不振の今日幸に一讀を煩すを得んか。

廣 告

主筆内村鑑三

東 京 獨 立 雜 誌

毎 月 三 回

五 の 日 發 行

政治、社會、文學、科學、教育並に宗教上の諸問題と正直に自由に大膽に評論し、該博なる智識と共に高尚なる精神を供す

定價一部六錢郵稅五厘、十部前金郵稅共六拾錢郵券代用は一部に付五厘増
見本一冊郵券七錢

東京市神田區佐柄木町二十一番地

東京獨立雜誌社販賣部

内村鑑三著

再版 外國語之研究

定價金貳拾五錢

郵税金 四錢

目次●外國語研究の利益●世界の言語に於ける英語の位置●平民的言語としての英語●英語の美●外國語研究の方法●日本語に現はれたる歐羅巴語●博言學と地名●最良の英語讀本●英語自習獨學の注意●西班牙語の研究

外國語研究の精神を鼓吹し其方法を示すに於て蓋し我國唯一の書なるべし

内村鑑三編

英和時事會話

定價金拾八錢

郵税金 貳錢

此書を繙く者は英語を學びつゝ別に一種の感慨に接するあらん

内村鑑三述

再版 後世への最大遺物

定價金拾五錢

郵税金 貳錢

説く所人生の最高問題に涉り、志士の熟考を促すに足る事多し。

内村鑑三著

小憤慨録

定價金參拾錢

郵税金 四錢

著者衷心の大憤慨が機に觸れて閃發したる、文學宗教教育時事等に關する論文と韻文とを蒐集したるものなり。

東京市神田區佐栢木町廿一番地

東京獨立雜誌社販賣部

▲内村鑑三氏著書

四

●四版(原詩) 愛吟

定價 金 拾五錢
郵税 金 貳錢

著者が愛誦する歐米大家の短篇二三十を纂譯したる者、まゝ奇警の註解を加へたり、高吟低誦以て胸懷を清新にすべく、また語學の練習に資すべし。

●四版 地人論

定價 金 四拾錢
郵税 金 四錢

著者が其獨特の眼識を以て地理と歴史とを連觀し、其趣味多き詩筆を揮ひ、山河形勢の偶然にあらず、國民興亡の徒爾にあらず、大地の風象が人類歴史の開展に關係する如何に深且大なるかを説示したるもの。

●英文 余は如何にして基督信徒となりしや
(How I Became A Christian)

定價 郵税 共 金 五拾錢

此書一たび出て、米國思想界の注意を惹けり

●三版 増補 求安錄

定價 金 參拾錢
郵税 金 四錢

是れ著者が死の蔭涙の谷に沈淪彷徨し激戰苦闘の後安きを得たる實驗の記録なり、靈奥に憂悶あり心裡に悲痛あるの人、之を讀まば庶幾くば確信、希望、讚美の境涯を悟得するの一助たらん。

●再版 宗教と文學(月曜講演改題)

定價 金 十五錢
郵税 金 二錢

著者が多年研讀せる文學者と聖書等に關する評論なり、評論の際特に當今の時世に向て主張し教訓せんとせし所多く、讀者をして文學の真趣を味ひつゝ兼て人生の本旨に想到せしむるものあらん。

●再版 ユロシブスと彼の功績

定價 金 十二錢
郵税 金 六錢

彼と其偉業及び其時運とを詳論せるものなり

●傳道 の 精神

定價 金 十五錢
郵税 金 四錢

本書は真正なる傳道の何たるかを痛論したるものなり

五

近刊

(目下印刷中。近日出来)

定税價金 廿五錢
郵税金 四錢

▲四基督信徒の慰

此書に於て著者は身を不幸の極點に置き、悲哀に沈み苦痛に惱める人々に、高き理想と清き信念とを説明して、以て情與に永久の歡喜を供し、心底に深遠の慰勵を興へんと努めたるなり。

▲貞操路

得記

(再版)

定税價金 拾五錢
郵税金 四錢

聖書の理想的婦人の如何なるものなるかを見るべきの書にして、またユダヤの古代に於ける美風と想像せしむる好物語なり、註解警拔にして一段の精彩を發揮せり。

東京市京橋區采女町二十四番地

警醒社書店

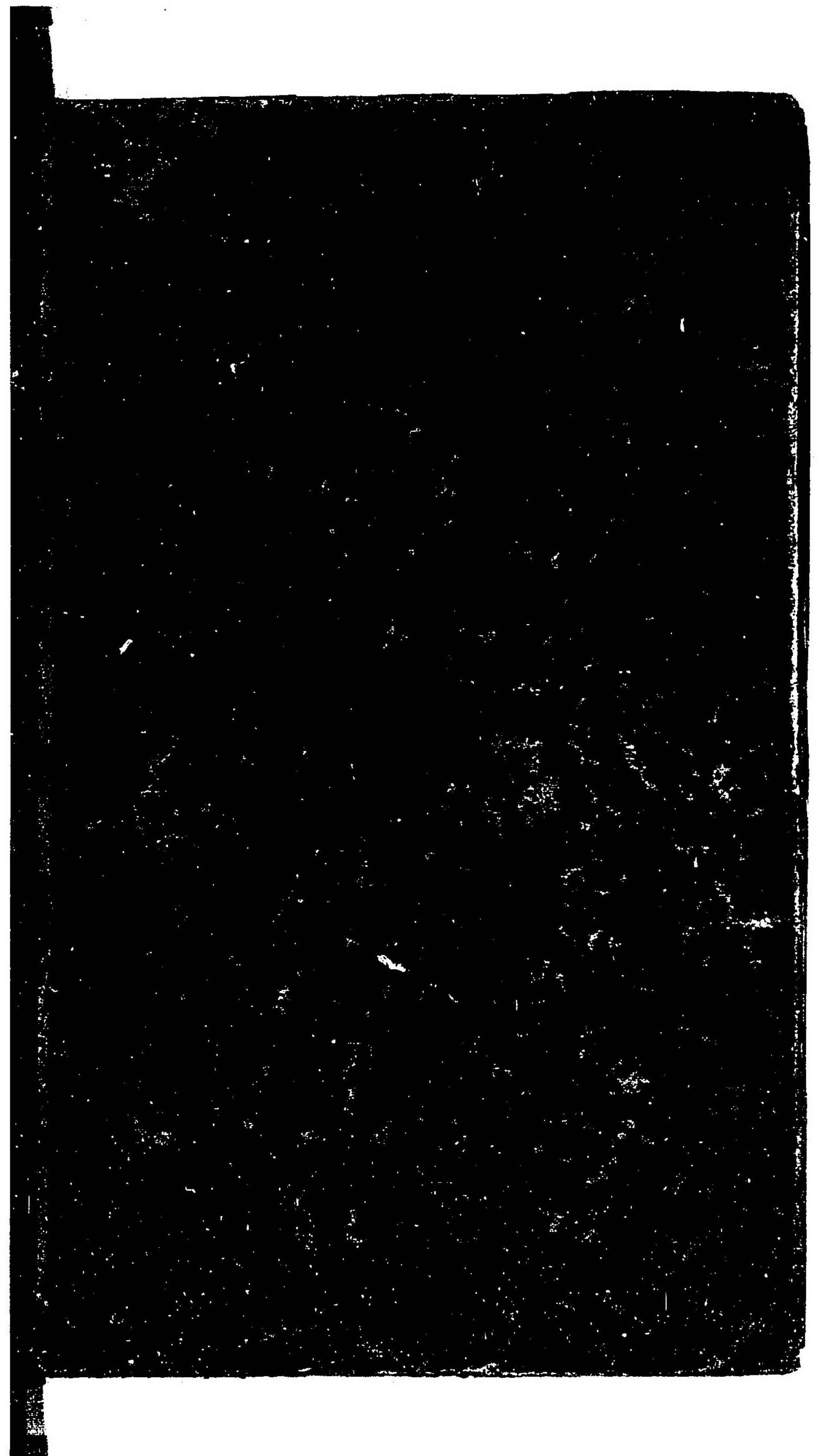
發兌

東京市神田區佐柄木町廿一番地

東京獨立雜誌社販賣部

受次

68
492





Ⓜ

020612-000-8

68-492□

警世雜著

内村 鑑三／著

M29. 12

ABI-0427



